

第十回 AJ フォーラム（研究会）

「親米と反米——戦後日本の政治的無意識とアジア」

日程：2007年7月21日（土）

場所：国土館大学世田谷校舎 中央図書館 AV ホール

吉見俊哉（東京大学大学院情報学環長）

本日は、最近出した『親米と反米 戦後日本の政治的無意識』（岩波新書）をベースにしながら、近代日本および東アジアにおけるアメリカの存在について話をしてみたいと思います。

以前、『ドナルド・ダックを読む』という本を学生に読ませたところ、非常に評判が悪かったということがありました。これは文化帝国主義批判の立場で書かれた名著ですが、学生たちからは大好きなディズニーを批判されたくないという拒絶反応が出たのです。イラクを攻撃するアメリカはたしかに嫌いだけれど、ディズニーランドは大好きだ、となる。しかし、むしろミニタリーなアメリカとコンサンプションのアメリカとの接続回路をどのように考えていくことができるか。私の認識では、戦後の日本は他のどの国と比べても非常に強い親米社会です。しかも、データを見てもこの意識は戦後これまでずっと安定しています。この安定性をどういう風に考えることができるだろうか。その問題を大衆文化のレベルから取り組んできました。

ジョン・ダワーの『敗北を抱きしめて』は、戦後日本の天皇制がいかにアメリカの戦後占領との談合や社会運動のなかで構築されていったのかをうまく説明しています。ただ、この研究は、占領期における天皇裕仁とダグラス・マッカーサーとの談合に関しては鋭く見ていると思いますが、庶民の日常意識に関してはあまい。彼は、支配層と民衆との関係について、やや二元論的に語っているように思えるのです。私は、大衆のレベルでも日本人の多くは、アメリカに対してある種の談合、あるいは抱擁をしてきたと考えているのです。また、ダワーはどちらかというと日米関係しか見ていない。冷戦構造とその中でのアメリカの軍事的な体制、さらにそこから派生したアジアにおける連続的な空間 そうした構造の中で、戦後日本におけるアメリカというものを考えていかなければと思っています。乱暴な言い方ですが、アジアの中での戦後日本というものをアメリカとの関係の中で捉えようとするのは、戦前の東アジアにおける帝国としての日本の植民地支配から戦後のアジアにおけるアメリカのヘゲモニーを連続的なものとして捉えることにつながる、という風に私は思うのです。

なぜ日本が親米であり続けたのかという問いに対し、私は「快適だったから」という仮説をたてています。戦後の体制は、戦前までの日本の韓国や中国大陸に対する帝國的な支配権が、日本に対して政治的・軍事的な支配力を持つアメリカに吸収された。その構造を日本は積極的に受け入れたのです。アメリカという傘の下に入ることによって、東アジアでの副次的なヘゲモニーを得た。1950年代から70年代、韓国や沖縄や台湾が軍事的な要塞として確立されていった中で、日本だけは民主主義や消費文化を享受し、脱軍事化していった。それによって高度経済成長をしてアジア全体の経済的なナンバーワンになり、豊かな生活を他の国々よりかなり先がけて実行できるようになった。それは日本人にとりとても快適だった。大きな筋としてはそういう話です。

アメリカニズムとかアメリカ化という言葉の私なりの定義は、地域研究をしている人たちとは違います。私は、この言葉にはふたつの定義が可能であり、またそれが可能になってしまうというのが、アメリカという存在のもっている二重性を示していると思います。アメリカは、ネイション・ステイトであ

ると同時にグローバルであるという二重的な構造を持っている。国家であると同時に世界なのです。おそらく第一次世界大戦のころから、全世界がアメリカ化するようになります。軍事的にも経済的にも、単にひとつの国でなく、全世界の存在であるという意識をアメリカ自体も持ちはじめます。また、それぞれの国の中のプレゼンスとしても、アメリカは世界的な存在になっていきました。アメリカ化という言葉は、移民した人たちがアメリカ的な文化価値に順応していくというだけでなく、アメリカ以外の社会において、アメリカの文化的な要素が入ってくることによって文化的な構造が変化するということも指しているのです。

アメリカ以外の社会がアメリカを学ぶ、他者としてのアメリカになる。それをアメリカニズムという風に考えることが出来るだろうと思っています。アメリカニズムは、アメリカというネーションに内在する価値体系であるばかりでなく、サイドにとってのオリエンタリズムと同じ意味で、他者としてのアメリカに向けられるまなざしの関係構造です。東アジアにおけるアメリカニズムの問題を、私の本の中では三つのレベルで考えています。天皇裕仁とマッカーサー、都市空間における米軍基地と消費文化、そして家電を中心にした家庭空間におけるアメリカ。それについて、これからお話していきます。

天皇裕仁とマッカーサーの話をするに当たり、有名な写真があります。それは1945年9月27日に天皇がマッカーサーを訪れた際、撮られたものです。二日後の新聞にこれが大々的に載るのですが、この写真の開示の是非をめぐる内務省とGHQが争い、それがきっかけになって内務省が解体されたというのはよく知られたストーリーです。また、戦後の日米関係はこの写真によって象徴されていたとも言われます。大きく落ち着いたマッカーサーと緊張して小さな天皇。この写真を見て、日本はこれで負け、また戦後の日米関係はこのようになるのだとみんな実感したと。

しかしながら疑問はあります。そういった解説が一般化するのはいかなり後になってからなのです。同時代の人々がこの写真をどのように受け止めたのか、という記録は少ない。したがって写真だけを見て、当時からすべからく優越と劣等という観点から解釈されたと言い切ってしまうのは危険です。また、多くのオフィシャル・ストーリーでは、このときから天皇の人間化がはじまったとされていますが、それにも疑問があります。1946年以降、地方紙などにおける天皇の地方巡行の報道を見ると、戦前の現人神としての天皇を迎えたのと同じように、大々的にありがたいとしている例もある。また「ニセ天皇」がたくさん出てきて、ある程度のシンパを集めたりしている。

そういったことを考えると、あの写真を単に戦後の体制の基本構造であるとか、これだから日本は敗北したと納得したなどとは言い切れないのではないかと。いろいろ調べていくと、意外なことに、あの写真は非常に例外的だったということが分かります。ダグラス・マッカーサーは、約六年にわたって日本に滞在し、圧倒的な政治的権力を持っていたのですが、新聞や雑誌などメディアにおける露出というのは驚くほど少ない。おそらくこの少なさは意図したものではないでしょうか。フィリピンでは記念切手になるほど公に出ていたにもかかわらずです。代わりに誰が国民の前面に出て行くようになったのか。天皇裕仁です。マッカーサーが出ないことによって、天皇裕仁こそが主人公であるという信憑性が生まれる。あの写真はおそらく例外的に出たけれど、占領期全体を通じた戦後日本では、マッカーサーは意図的にフェイドアウトした。そうすることによって、アメリカという存在は逆により強く日本に流れ込んだ。というのが私の考えているところです。

次に都市空間についてお話しますが、これも二面性を持っています。占領期・戦後を通じて膨大な数の米軍基地が作られました。戦後の関東地域におけるアメリカの軍事施設の配置というのは、GHQの

基地があった日比谷・霞ヶ関一帯から六本木、広尾、原宿へと、東京の中心地から南及び西に向かってずっと広がる地帯に重点が置かれました。大きな基地が横須賀や厚木にあったため、多摩地域から湘南にかけてが米軍の中核地域でした。そうするとだいたいそのあたりにアメリカ軍の施設が配置されます。1970年代以降、東京において若者たちにとってもっともファッショナブルな街となったのは、かなりの程度この米軍施設と重なっています。原宿や六本木、麻布というのは戦前から軍隊の街です。それがゆえにアメリカ軍が占領し、その進出にしたがって周りに米軍関係のレジデントや店ができ、オンリーさんみたいな人たちが住むようになった。そこにちりばめられた横文字文化というものに若者達が惹かれ、流行を追う人たちが集まった。

グローバルな権力の編成という視点から見ると、1950年代、朝鮮戦争や冷戦という中であって、アメリカはアジアにおける世界戦略として日本を東アジアの経済的なセンターにしようと考えていました。日本が持っていた工業力を考えると、東アジア経済を安定させるにはここが重要だったのです。他方で、沖縄や韓国や台湾というのは、社会主義圏に対する軍事要塞でした。この基本的な戦略があって、1950年代から1960年代にかけて、東京圏の基地施設はすこしずつ返還されてきました。東京圏のなかで、あるいは日本の大都市に住む人々にとって、米軍基地の存在を意識しないでもすむようになったのです。暴力的な他者という姿がフェイドアウトしていき、アメリカ的・外国的なものをファンタジーとして受け入れ、消費していく準備が整っていった。その結果、一番シンボリックなところでは、六本木や原宿といった元米軍基地の街がどんどん若者仕様に発展していきました。

同じことが湘南にも言えます。湘南海岸や横須賀にはアメリカの軍事的な基地群が並んでいました。それが、湘南ボーイやトレンディな湘南というイメージへと変容していった。ここだけでなく、ハワイにしても、グアムにしても、沖縄にしても、フロリダにしても、アメリカ軍基地とリゾートというのはリンクしています。その関係をシンボリックに出しているのが、ビーチと基地のあった湘南海岸でしょう。人気を博した石原裕次郎主演の映画『狂った果実』は、湘南を舞台に裕次郎が米軍のオンリーさんである女性を好きになるという設定でした。

最後に家電の話です。ファンタジー化されたアメリカは日常の中で受け入れやすいものになりました。軍事的な他者ではなくて、われわれのアイデンティティを保障してくれる他者になったのです。そのプロセスを考える上で、家庭電化はいい材料になります。

家庭の主婦が使用する家庭電化という概念は、1950年代半ば以降初めて出てきます。家電という言葉もその頃発明されました。それを買って揃えるのは奥様です。主婦こそが新しい家電の主体であるという文化が生まれまたのです。洗濯から食器洗いまですべて電気のアメリカ生活。それに比べて、我々はこれでいいのか、と。松下電工の広告にこういうものがありました。「日本の憲法第二十五条には、国民は健康で文化的な生活を営む権利があるとうたわれています。そのひとつに家庭の電化があります。この家庭電化こそが日本の民主化を可能にするものです。あなたの周りをご覧になって、より便利に、より楽しい生活の設計をお立てになってはいかがですか」というものです。つまり、家庭の電化というのは民主化であり、そしてその民主化を推進する主体は奥さまあなたですよ、この広告はそう言っているわけです。

ここで言う民主化、それは言うまでもなくアメリカ化です。アメリカ化イコール家庭電化、家庭電化イコール民主化。この公式の中核を担っているのが奥様なのです。しかもこの広告の面白いところは、実際の日本国憲法第二十五条は、「すべての国民は健康で文化的な最低限度の生活を営む権利がある」となっているのですが、松下は意図的に「最低限度の」という言葉を削除し、目指すべき文化生活のイ

メージをうたっています。

この家庭電化というアメリカ化が次にナショナル化、つまり日本化につながります。アメリカ化することによって、戦後の日本人はナショナル・アイデンティティを再構築することができたのです。1960年前後からメイド・イン・ジャパン・タイプの家電広告が出てきます。それには必ず「アメリカでも折り紙つき」と書かれていました。アメリカというまなざしによって日本の技術力が保証されている。だから自分たちは自信を持っていいのだ、という理論です。そうすると、技術面という男性的な領域でもアメリカに認められ、家庭の奥様たちは女性的な領域においてアメリカン・ウェイ・オブ・ライフを追求している。つまり、女性主体においても男性主体においても、その両方の主体構築がアメリカを媒介になされているというのがわかります。そういうことによって、1970年前後になるにつれ、一方では軍事的なアメリカというのはフェイドアウトし、他方で生活そのものの中に入り込んでくる。それは自分たちのアイデンティティや生活の快適さを保障してくれる他者としてのアメリカです。

日本人が親米的であるというのは、アメリカを否定すると自分たちのアイデンティティそのものが不安定になるからです。アメリカに寄り添う、アメリカに担保されることによって自分たちのアイデンティティが確立されてきたのです。それが、おそらく1990年以降、揺らいできている。けれども他に自分たちのアイデンティティを担保できるような仕組みを確立していない。親米的であることのジレンマというか、ある種の違和感を抱きながらもそこから離れられない、というのが現在の日本の状況ではないでしょうか。